第五章　神徳元年

西小笹村（現、匝瑳市）の地蔵院は、大河内家の祖先伊藤河内守為安の白い愛馬を祀ったと伝わる仏堂である。ここに、不二心流初代中村一心斎の供養碑が建てられたのは、慶応二年も暮れかけた清秋のころであった。同種の碑はすでに木更津の成就寺にもあったから、今後も大河内家が正系を継いでいくと宣言したようなものである。この碑の建立を祝して大河内本家で盛大な酒宴が催され、房総各地の高弟たちが一堂に会した。島屋門と袂を分かつことになった伊藤実心斎もこの日ばかりは一族の席に連なり、石面に門弟の一人として自身の名を刻字するつもりであった。

そこへ、遅れてきた正道が、常盤之助と斎藤常次郎を帯同して現れ、

「皆々、ご覧あれ！」

一同を見回しながら、旗とおぼしき大布を広げた。そこには、

「義勇隊」

という三文字が、闊達な筆で大きく書かれていた。

「天下はまさに、危急存亡の秋です」正道の声が境内に響いた。

「中村一心斎先生の御遺志を継ぎ、治国安民の志をもって剣士隊相建て、万死を以て佐幕の宿志相貫き、徳川家御急務の御用は申すに及ばず、率先して御馬脇を守護奉らん。国事日に急なれば、節義を守り、実戦の訓練に相励み、天領の鎮めをして、重きを房総半島になさしめん」

と、義勇隊の結成を宣言したのであった。

さらに正道は、結成の盟約書を神文として、一族と門弟に血判を求めた。

が、長州征伐における幕府軍の敗北はすでに周知のものとなっており、天下の形勢は依然混沌としている。いま幕府に肩入れすることが賢明な判断なのかどうか、多くの者は決めかねていた。まずは範を示すように縫殿三郎が筆をとり、脇差の切尖に小指を当てて血判してみせた。幸左衛門、孫左衛門、八剱勝秀、総三郎がこれに続き、席次からして次に

名を連ねるのは藤城吉高である。

しかし、一心斎の高弟で、二世縫殿三郎の弟弟子でもある吉高は、以前から正道の慷慨にかられた政治活動に懐疑的であり、流派を挙げての佐幕派宣言は時機早々として連名血判を辞退した。宮川（横芝光町）熊野神社の祠官で、領主内藤因幡守の撃剣指南役でもある吉高は、九十九里浜の海防政策にも深く携わっており、時事に精通している。この不安定な政情下で親幕の旗色を鮮明にすれば、

「火中の栗を拾うことになりはせぬか」

と、しごく真っ当な疑問符を呈した。さらに、前々から抱きつつあった疑念をこぼさずにもおれなかった。

「近頃とみに、大河内家が不二心流を私物化しておるように思われるのだが、如何なものですかな、宗家」

縫殿三郎は、初代の面影を偲ぶように自らも顎髭を長く伸ばしている。これをゆっくり胸の上で撫でつけながら、好々爺のごとき面持ちで断言した。

「精一杯世の中のために働くことこそ、一心斎先生のご遺志を継ぐことになると信じておる。それ以外に他意なぞあるわけもない」

「うむ」と吉高はうなずいた。

「我が藤城家は代々神官であるから、佐幕の情も浅からぬが、敬神尊王の真心を軽んずることもできぬ。天朝の宸襟を安んじ奉るべしと願う気持ちも抑え難ければ、正道、わしは義勇隊の件、聞かなかったことにする。さらにはこれを機に、二世の門流と決別し、新たに一流を立てたいと存ずる」

この言を受けて、縫殿三郎の高弟である三沢勘右衛門も、

「わしも血盟は辞退する。〈後の先〉を要諦とする我が剣法をもって、軍を起こすなど理にかなわぬ。かような逸脱をゆるす宗家とは一線を画して苦しからず」

と、離脱の意志を表明した。

藤城派も、三沢派も、一心斎供養碑に一礼すると、それぞれの門弟を引き連れて地蔵院

から出て行ってしまった。
その彼らの背中に向かって、常盤之助が声を大にして叫んだ。
「よくもまあ、百難一時にふりかかる動乱の時代に、流派だの何だのと流暢なことを言っておられるものだ。しょせん一郷のことしか知らない井の中の蛙じゃないか！　ここで使わずして、なんの武技か！　ここで捨てずして、なんの命か！」
これを聞いて、何人かが足を止めた。
そのうちの一人が踵を返すと、真っ直ぐに常盤之助の前にやって来て胸ぐらを掴んだ。
藤城吉高の跡継、吉隆だ。
「ずいぶんな物言いだな、常盤。壮士気取りもたいがいにしろ」
「長賊と薩摩の芋どもは、三百年来政事を知らぬ朝廷を担ぎ出し、日本六十余州を我がものとする腹積もりです。そのようなときに、指をくわえて見ているだけですか。我らは将軍の御膝下で先祖代々暮らしてきたのです。今こそ、その御恩に報いるときではありませんか」
「我ら藤城家は、嘉永年間より九十九里の海岸防備に携わり、内藤因幡守様から扶持さえ受けておる。耳学問で政事をかじった程度の若造が、義憤にかられて差し出がましいことを言うな」
「一発でも、大砲を撃つような事態を経験したのですか」
「なんだと」
「海岸防備といったって、ただ海を眺めているのであれば、耳学問と変わりませんよ」
「愚弄するか！」吉隆の手が刀の柄にかけられた。
「そこまでッ」と割って入ったのは実心斎である。
「決起したい者はすればよい。術理を極めたい者は極めるまで。一心斎先生の遺徳を偲ぶ者として、それぞれの道を行けばいい」
鯉口を切りかけた吉隆であったが、常盤之助のことを睨みつけたまま、大きく一度、肩で息をした。

「もう行け」実心斎が叱るように言った。
藤城派も、三沢派も、しばし宗家の人々を睨み据えていたが、やおら踵を返して去ってしまった。
実心斎も菅笠を被り、顎にかけた紐を結んだ。
「あかじゅう、名を刻みに来たのであろう」
総三郎が刻字ノミを差し出したが、それをすげなく振り払い、
「やめておく。興ざめしたわ」
竹刀の先に風呂敷包みを引っかけて、ふらりと歩き出した。
常盤之助のこめかみに青い筋が浮き上がった。
「藤城や三沢の離反は惜しむに足りませんが、実心さんは血族でしょう！　我らが決死の思いで立ち上がろうとしているのに、なぜ同心してくれないんですか。腰間に剣を帯びながら、天下を憂う心もなければ、組太刀しか知らぬ太平楽な剣士で終わりますよ！」
振り返った実心斎は、ふっと鼻で笑い、いきなり常盤之助の股を蹴り上げた。
「どうした常盤、急所ががら空きだぞ。これが実戦であれば、金玉を田楽刺しに貫かれておるわい」
地べたにうずくまった常盤之助を一瞥して、呵々と笑った。
「やめんか！」温厚な縫殿三郎がめずらしく声を上げた。「ここは我が一族の浄域ぞ」
身悶える常盤之助に常次郎が駆け寄って、かがみ込んだ。
「ひどいことをするものだ。常盤之助殿が何ぞ間違ったことを申したか」
実心斎は肩に竹刀をかけたまま眉をひそめた。
「おまえはどこのものだ」
「西小姓組斎藤久右衛門利義が嫡子、常次郎じゃ」
「剣は」
「直心影流」
「ならば他流のことに口を出すな。我が流派は考え方が複雑なのだ」

実心斎はあらためて縫殿三郎の方へ向き直り、容儀を正して深く頭を下げた。我ながら大人げなかったと思ったのかもしれないが、どこか吹っ切れた様子でもあり、日ごろ嗜む謡を、実にいい声でうなりながら歩き出した。

「散り散りになる一葉の、舟に浮き波に臥して、夢にだにも帰らず……」

空も刈小田も静まりかえった秋の午後、足駄が落ち葉を踏む音が遠退いていった。

「これで良かったんだ」と沈黙を破ったのは、本納村(茂原市)農具鍛冶職人、平右衛門であった。本家道場の師範代である。

「あの者らが去って、門統が正されたではないか。おれらは一枚岩となって生死を共にすべえ」

ウムとうなずいた孫左衛門が、日の丸の鉄扇を開いた。

「平右衛門、よくぞ言った。これからは我らで正道を支え、房総各地の有為の者を糾合し、義勇隊を盛り上げてゆこうではないか」

これを受けて正道は深くうなずくと、一心斎供養碑を取り囲む大河内島屋門の高弟たちに向かい、

「我ら、今日この時より、義の一字を掲げて二心を抱くことなく、身命を賭して徳川幕府に忠誠を誓う。

金打！」と叫んだ。

その場にいる全員が、己の佩刀の鍔元をカチンと鳴らし、互いに申し合わせたわけでもなかったが、拳を振り上げた正道の「えい、えい」という掛け声に合わせて、

「おお！」

と気勢を上げた。

不穏な暗雲が迫りつつある。

歳末二十三日、時の帝、孝明天皇が崩御された。

振り返ってみればこの一年、貿易の混乱、市場の品薄、幕府の貨幣悪鋳などによって引

き起こされた物価高騰はとどまることを知らず、各地で一揆や打ちこわしが頻発した。幕府と諸藩の連合軍は長州一藩にあっけなく敗れ、十四代将軍家茂は陣中で病没。この上、天皇の崩御である。不吉という他ない。

ペリー来航当時、墨夷(アメリカ人)が日本語をまったく解せず、漢字すら読めず、百舌のさえずりにも似た異様な言語しか話せないとの報告を受けた孝明天皇は、愕然としたという。しかも彼らは生娘の血をすすり、その肉を切り刻んで食べている(赤ワインを飲みながらナイフとフォークで肉を食すという習慣が誤って伝わった)というのだから、震え上がったのも無理はない。以来外国人を毛嫌いすること甚だしく、これが尊王派志士たちの攘夷熱を煽る結果となり、幕府との対立を激化させた。しかし、その大御心に政治的な野心など微塵もなく、どちらかといえば徳川幕府に好意的なぐらいであった。殊に都を守護している会津中将(会津藩主、松平容保)を誰よりも信頼していた。かえって勤王を標榜する薩長に対して不信感をつのらせている節もあったから、突然の崩御について、革命寄りの過激派公卿の手による毒殺説までささやかれたほどである。

このような世情騒然たる時こそ、荷元を買占め、相場を競り上げ、投機的な利を得ようと奔走する商人もいる。五月に打ち壊された木更津の米商などもその類であったろう。

が、開けて慶応三年正月、天皇死去の触書が布達されると、さすがに露骨な山っ気をみせる商人はなりを潜め、むしろこの深刻な社会不安がおさまるまで、連帯や相互扶助によって身の安全をはかりたいと願うような風潮が、商家の間に広まりつつあった。

そんなときである。横田村河内屋の川名里鹿から、西上総地域の豪商豪農の当主に向けて、話し合いの場を設けたいとの呼びかけがあった。人々はそれを聞いてすぐ、総三郎のオヤジが日夜奔走しているあの件だと察した。いつの間にか川名里鹿の名が前面に出てきている理由こそ知れないが、かつて大奥の老女に仕えたあの川名さんが乗り出してきたというだけで、なんとなくお上の後ろ盾を得たような安心感を抱けるから不思議なものである。しかも、川名里鹿といえば音に聞く美女だから、一癖も二癖もある旦那衆が年始早々からいそいそと、会場に指定された「至徳堂」に顔をそろえたのであった。

至徳堂は巖根村(木更津市）高柳の茶臼塚に学舎が建っている。この塚はかつての前方後円墳であり、明治末年の鉄道敷設によって前方部が削り取られ，太平洋戦争中に高射砲指令所が設置され後円部も大きくえぐられてしまったが、今でもわずかに古墳の面影をとどめる草深い丘となって、ＪＲ内房線の車窓から眺めることができる。

集まった旦那衆の多くは銀杏髷に防寒用の頬かむりをし、歌舞伎役者が着るような派手な長合羽を羽織っている。商売繁盛の意味をもつ瓢箪の小紋柄をあしらったものも多い。

「今年もよろしくお引き立て願います」などと新年の挨拶を交わしつつ、めいめい講堂の好きなところに座布団を敷いたが、上座を見据える位置に座を取ったのは藍屋作左衛門であった。この人ばかりは一筋縄ではいかぬだろうと誰もが思っている。

やがて座敷が旦那衆で埋め尽くされると、川名里鹿を筆頭に、総三郎、三河屋喜平次、長須賀屋卯八が続いて入室し、皆と向き合う格好で上座に腰を下ろした。里鹿のちょうど正面に、作左衛門がいる。いつの間にかざわついた堂内が、しんと静まり返っていた。

「この度は、わたくしの呼びかけに応じて下さり、改めて謝意を申し上げます」

里鹿が深く身をかがめて座礼すると、作左衛門を除く全員が頭を下げた。

三河屋喜平次は真っ直ぐな性格だから、黙っておれない。

「藍屋さん、なぜ頭を下げない。失礼ではないか」

「初めに断っておきますが、わたしが今日こちらに参ったのは、わたしも皆さんの商売仲間として、このような会合を他人事なぞとはゆめゆめ思うてはおらぬと示したかったからです」

と、作左衛門は手を膝にして微笑んでみせた。

「しかし、わたしは以前にもあなた方に申しましたように、商人が徒党を組み、商いについて論じること自体に懐疑的なのですよ。このようなことを申したら、定めし皆さんのお怒りを買うでしょうが、不況に耐えられないような商家は潰れてゆくのが道理であり、日雇い者は最低の賃金に甘んじるべきだと思うております。それが嫌なら浮浪人になればよい。わたしの経験から申せば、放っておけば商品の相場や賃金は時価に定まる」

そう断言した後、体を傾けて背後にいる旦那衆をゆっくりと見回した。

「皆さんにしても、ここへ来たのは一身の安全を願う利己心からでしょう。いやいや、それが間違ったことだと申しておるのではありませんよ。この方たちはね、その利己心を捨てよと、そういう取り決めをするために我々を招集したのです。いわば、これまでお上が性懲りもなくやってきたことを繰り返そうとしておるわけだ。皆さん、よく考えてごらんなさい。御公儀の改革なぞ、一度でも上手くいったためしがありますか。われわれが価格や利息の取り立てに手心を加えると、とたんに財の通用は停滞する。これまでにも、嫌というほどそんな顛末を見てきたでしょう」

その場にいた誰もが、隣の顔色をうかがい、にわかに講堂がざわついた。

「お言葉を返すようですが」と里鹿が言った。

「私どもがご提案させていただきたいのは、御公儀の改革のようなものではございません」

「では、なんですかな」

「皆さんと力を合わせて困窮した民を救済したいのです」

「これまでにも幾度と、高騰した米価を下げるために幕府がただも同然の値で備蓄米を売りに出したでしょう。それで問題が解決されましたか。民にいくらお救い米をくばったところで、効果はほんの一時、しかも我らには何の利益もない。川名さん、この極端に不安定なる時代に、他人の世話などしておる場合ですか。やりたければお宅の広大な田畑を売り払って、貧民に分け与えればよい。そういう事でしょう」

たちまち総三郎の顔が真っ赤になった。「それはちがう」

「なにがちがうのです」

「ちがう！　ちがう！」

口角泡を飛ばして総三郎が怒鳴り出すと、野次が飛び交い、興奮して立ち上がる者もあり、騒然となった。

そこへ、

「遅れました」
と重城保が入って来た。
皆が振り返ると、やや間をあけて嶺田楓江も現れた。片手に酒瓶を持っているあたり、昼間から飲んでいる。
「重城生よ、そう怒るな。なんすれぞその生を労するや、ゆえに終日酔うておるのだ」
「前からお願いしていたではありませんか。今日は至徳堂の会合に出ていただくと」
「だからこうして来たではないか。
おお？」と楓江は目を輝かせて里鹿の姿を眺めた。
「氷肌玉骨とはこのことか。そなた、名を何と申す」
「楓江先生、お初にお目にかかります。横田村の川名里鹿です」
「なんとまあ、解語之花とはこのことか。ん、カワナリカ？　もしや林忠英公に推されて大奥に出仕したという、あの娘御か！」
楓江は片手を振って扇子を開き、それをバタバタさせながら旦那衆に向かって、「ここにおわす方をどなたと心得る、将軍付上臈御年寄、筆頭老女万里小路局にお仕えなされた上級御女中であらせられるぞ、頭が高い、控えおろう！」と、台詞回しのような調子で声を張り上げた。酔っている。
重城は上座の端に腰を下ろすと、皆と向き合い、あらためて居住まいを正した。
「本日は、我が至徳堂が誇る顕学、嶺田楓江先生の御意見を伺いたいと存じ、お連れ致しました」
楓江は里鹿の傍らにしなしなと座り、横顔をうっとりと眺めながら、これまでの経緯を長須賀屋卯八から説明された。茶請けの菓子を口に放り込み、茶を干すと、そこに手酌で酒を注ぎながら、
「藍屋作左衛門殿の言は、誠にもって正しいと言わざるを得ぬ」とうなずいて、冷や酒をすすった。
「財の通用に関しては、なるほど作為を用いない方がよろしい。しかれども、墨夷艦隊来

航以来、元和偃武より打ち続く泰平は一夜にして崩れ去り、物価騰貴、民塗炭に墜つ。その民情を尋酌し、遠慮善謀するのであれば、里鹿殿らの申す通り、私欲を制し、人の人たる道を歩むべきであろう。速やかに米倉を開いて万人の辛苦を除かねば、信を失う」

これを受けた作左衛門は憮然として扇子を膝に突き立て、やや声を荒げた。「先生のような学者に、商売の何がわかるというのだ」

「その通り」とうなずいて、楓江はぐびりと一杯干した。

「小人はもとより君子の行いを踏むことなぞできぬものであるが、作左衛門殿、そなたは間違っても小人ではなかろう。木更津の藍屋と申せば文人墨客で知らぬ者はおらぬ。どれほど多くの文化人がそなたの家に草鞋を脱ぎ、世話になったことであろう。そなた自身、幼にして学を好み、和歌、蹴鞠、茶事に長け、財をもって驕らず、堅実な商いをしてきたと評判の御仁。なれど、長らく続く不況のために、眼前の損益得失にばかりに心を奪われておるようだ。ここに居られるお歴々もご同様。そなたらは飽食暖衣な暮らしを送り、玉堂に起臥しておるから、民に飢渇が迫りつつあるのを忘れておるのだ。そう。忘れておるだけなのだ。人の人たる道は、他人が禍を受けた時はこれを憐み助けるものであろう。一刻も早く救恤米を供出し、必要な者には無利息で金を貸し、困窮した人々の生活を安らかにされよ。さすれば至誠は天に通ずる。そなたらの行いが、積善となり、陰徳となり、めぐりめぐって子孫の代にまで及ぶ幸福となりましょうぞ」

楓江が茶碗を傾けて酒を飲み込む音以外、なにも聞こえないほど堂内が静まり返った。

「それ以前に」と言って、楓江は小さなゲップをした。

「こんなに美しい女人が頭を下げておるのだから、心魂を砕き身を粉にせねば、男が廃るというものよ。のう！」と周囲を見回して笑い出したから、一座も大きな笑いに包まれた。

しばし憮然としていた作左衛門も、やがてつられて笑い出し、扇子で軽く肩の辺りを叩いた。

「あにはからんや、先生の金言に負けましたよ。よろしい、仁慈の心を発奮し、民百姓を

安んずる道に努めましょう」

「ああ、賢なるかな」楓江が膝を打つと、拍手喝采が起こった。

里鹿が立ち上がって作左衛門の手を取ると、総三郎は深く首肯して感涙をもよおした。

社会活動を始めるにあたって、総州の商人や名主が何よりも懸念するのは、大原幽学の轍を踏むことであった。

大原幽学は、干潟八万石にある長部村(旭市)を拠点に、天保年間から農村復興事業に奔走した農民指導者で、農業協同組合の前身ともいえる先祖株組合を結成するなど、確かな改革の実を上げている。幽学の農政学は広く伝播し、各地の民が地域の枠を越えて活発に交流するようになったが、これを怪しんだ幕府は彼の活動を弾圧し、押込百日、学習会の禁止、先祖株組合の解散を申し渡した。改革農村は再び荒廃し、それを嘆いた幽学が六十二歳で自殺したのは安政五年のことである。まだ人々の記憶に新しい。

したたかに酔いしれて上機嫌だった楓江が、飲む手を止めて、キッと目を据えたのは、この幽学の話題を持ち出したときである。

「お歴々よ、里鹿殿らの提唱する活動を開始するにあたって、まず念頭に置くべきは大原幽学翁のこと。よほどの覚悟を決めてかからにゃあなりませんぞ」

しばし堂内がざわついたが、それを打ち破るように常代村（君津市）の豪農高間伝兵衛が挙手した。代々伝兵衛の名を襲名しているこの家は、八代将軍吉宗公の時代には米方役に任命され、現在は武州川越藩松平家の御用高として仕えているという名家である。家業柄、政事をよく知っている。

「あたしら周淮郡内の村々でね、ちょうど伊勢講を結成したばかりなんですよ。先帝崩御ということで、今年あたりお陰参りが流行るとみましてねえ。西国の情報収集と村人の娯楽を兼ねるつもりだったんですが、どうです、皆さんこの講中に参加しませんか。神の功徳、神の威徳にあやかりたいと〈神徳講〉なぞとたいそうな名を付けたんですが、御利益のありそうな響きでございましょう。皆さんがこの講の講員となれば、集会や連絡、資金

のやり取りなど、御公儀に怪しまれることなくやれますよ。いわば講中を、隠れ蓑にするという寸法です」

なるほど、と皆が膝を打った。伊勢神宮をお参りするために人々が行政区画の範囲を越えて信仰グループを結成することは、江戸期を通じてめずらしくなく、こればかりはお上も黙認していたのである。

長須賀屋卯八が里鹿の方に顔を向けて、

「ならば我らのこの集まりを、神徳講と致しましょうか」と伺いを立てると、里鹿はにっこり微笑んで、

「意義ありません」と答えた。

神徳講の結成趣意は、定期的な会合、情報の共有、相互扶助、窮民の救済、米価と賃金相場の安定、これに加えて先日結成された義勇隊の活動支援などである。

「皆さん、くれぐれも」と卯八が声を大にした。

「神徳講のことは口外無用、講中に関することは日記にも手紙にも書かないよう願います。これはいわば隠し念仏のようなもの、秘密の結社であることをお忘れなく」

秘密を共有することで結束が強まるという心理を、彼らは経験的に知っている。

会合の締めくくりに一言求められた里鹿が、思いもかけない提案をした。

「先年は総州一帯で打ちこわしが起こり、西国の戦にも敗れ、あまつさえ公方様逝去の悲しみが癒えぬ間に、天子様も崩御なされました。依然国内の情勢は不穏ですし、人心も動揺しております。この際、どうでしょう、わたくしたちの行く末に幸多きことを願って、新たに迎えた慶応三年を、この講中でのみ、〈神徳元年〉と致しませんか」

これを聞いた楓江は、意表を突かれた様子で天井を見上げ、

「私年号ですか…」と顎をさすった。

三河屋喜平次はポンッと膝を打ち、

「賛成だ。今こそ心機一転、皆で心を一にして、世上を立て直すときであろう」

拍手喝采が湧き起こった。熱気が堂内に満ちたのを肌で感じた総三郎は、ゆっくりと腰

を上げた。「皆々、ご起立を」

一月の冷え込みにもかかわらず、旦那衆の両頬が紅潮している。低迷した景気と暗い世相に翻弄されていた彼らの顔に、ひさしぶりの活気が戻ったようであった。普段から声の大きい長須賀屋卯八が推されて、「さあ、さあ、お手を拝借」両手をかっきり開いて音頭をとった。

「神徳元年を祝してッ、いよーお」

パンッ！

そのすがすがしい一丁締めの音は、冷たい空気を突き抜けて、茶臼塚の向こうまで響いた。

ここで話は、わき道にそれる。日本からフランスまでそれてゆく。

慶応三年、遠く欧州でパリ万国博覧会が開催された。フランス公使レオン・ロッシュの働きかけで、日本は初めて国際博覧会へ参加することになった。時の日本国政府は「徳川幕府」であるから、十五代将軍に就任した慶喜の実弟昭武が訪欧使節団を率いて渡仏する。この時期すでに日本産製品は先進各国で認知されており、高い評価を得てもいたから、世界のひのき舞台で徳川政府の存在感を誇示するには絶好の機会であった。

が、幕府に同道した薩摩藩が、あたかも独立国のごとく「薩摩琉球国」などと名乗って独自に出品を始めたから、使節一行は驚愕した。実のところ薩摩は、万博開催以前から五代友厚ら藩士を欧州へ密航させ、現地で周到な準備をしていたのである。五稜星に島津家の家紋をあしらった「薩摩琉球国勲章」を皇帝ナポレオン三世や勲章好きの各国高官に贈って大好評を博している。慌てた徳川使節団はアジア担当委員に抗議を申し出たが、遅きに失した。日本という国には徳川の〈大君政府〉と薩摩の〈太守政府〉とが共存し、必ずしも徳川幕府が唯一の政府なのではないという印象を列国に与えてしまったのである。これにより国際社会における幕府の信用は低落し、小栗忠順が進めていたフランスからの六百万ドルの借款も中止になってしまうなど、外交において薩摩に手痛い敗北を喫したので

あった。

神徳講結成以来、救恤米の大量供出、職人の手間賃や日雇いの賃金交渉などが行われ、不二心流島屋門が標榜する治国安民の実践的な活動が本格化していたが、幕府の直轄領では今なお四公六民の原則を破って年貢の増収をはかっているところも少なくない。幕末の代官統治は腐敗の極みに達しており、重税に耐えかねて夜逃げする者も後を絶たなかった。

「これら天領の田捨て百姓を周旋し、隊士の増員をはかりたいと思う」

正道は、相変わらず人に長たる威厳を醸しつつ、八劔八幡神社の道場に屯集している義勇隊幹部の面々を見回した。

この場に、常盤之助と斎藤常次郎はいない。福田八郎右衛門ら幕府陸軍将校との連絡役を務めるため、江戸へ向かった。

義勇隊の隊長には、筆頭発起人である正道が就いた。西小笹村の縫殿三郎は高齢を理由に表立った役付になるのを辞退し、「頭取」に幸左衛門、孫左衛門、八劔勝秀、友野七左衛門が推され、「船手組」に地曳新一郎、総三郎は神徳講の活動と兼務して「参謀」を勤める。中隊長クラスの隊士として八劔勝壽、「平さん」こと農具鍛冶職人の平右衛門などがいた。三千太郎はこの頃、諏訪数馬に稽古を付けるために請西藩の道場へ通っていて、正道の勧誘に応じていない。コンモと縫之進は平素と変わらず本業に勤しんでいる。

袖に片手を突っ込んで二の腕をかいていた新一郎が、

「いっそのこと、博徒も隊に引き入れたらどうだい」と奇抜なことを言い出した。

「ごぜき(五大力船)の客もよ、近ごろじゃ、見るからに身持ちの悪そうなやつらが増えてんだ。大方、江戸で食い詰めた無職渡世だと思うぜ」

田捨て百姓に無職渡世、これら無宿者の受け皿となっているのが各地の博奕打場である。無頼と化した連中が博徒の仲間に入り、あちこちで物騒な揉め事を起こしている。これら遊侠の徒を取り締まるために設置されたのが関東取締出役なのであるが、幕末に至って

治安の悪化に拍車がかかり、もはや出先機関の取締りぐらいでは統制できなくなっている。

正道は、道場の武者窓から漏れる日差しを眺めてしばし目を細めると、おもむろに向き直った。

「無宿者を隊士に加えて、逆に治安の維持に当たらせれば、一石二鳥になるな」

「まてまて」と異議を唱えたのは友野七左衛門である。

「その連中を養う金穀はどこにあるのだ。幕府の傘下にあるでもなし、神徳講からの援助だけでは賄えんだろう」

と、義勇隊が幕府の正式部隊として採用されなかった経緯を踏まえて、ちくりと含みのある釘を刺した。

しかし正道は、水のように冷静な表情を崩さない。

「治安維持の権限は村役人にゆだねられています。が、昨今の治安の悪化は、とうてい村の自警団の手に負えるようなものではなくなっている。ですから、我々がこれを代行するかわりに、隊士らの衣食は村方負担とすればよい。その他の費用に関しては、内々幕府陸軍所との繋がりがあるので、いくらかは都合してもらえます」

正道は確信をもって「その時」を待っている。小栗忠順が提唱する「中央集権郡県制」の実現に幕府が乗り出す、その時を。時至らば天領も旗本領も寺社領もなくなり、藩さえもなくなり、房州も総州も一個の行政区画となるわけで、腐敗した代官らはお役御免、一夜にして一掃されるだろう。さらには、幼冲の天子を奉じる薩長賊を打ち倒し、日本に新生徳川大君政府を樹立するのだ。小栗上野介忠順、福田八郎右衛門道直、幕府陸軍の士官たち、そして我が義勇隊がその先鋒となれば、天下の計はすでに成ったも同然と、正道の確信はいやがうえにも高まっている。

が、隊士の増員で出鼻をくじかれた。

衣食を目当てに入隊を希望する無宿者は多かったが、不思議なことに、博徒はほとんど募兵に応じなかったのである。兵隊は血の気が多い方がものになるから、博奕打あたりが

手ごろな人材となるはずであったのだ。

探りを入れてみると、房総の賭場の総本山は鹿野山で、ここに山博奕を取り仕切る侠客がいるらしかった。その男が、義勇隊の呼びかけに応じれば幕府の犬に成り下がるだけだ、と子分を焚きつけているという。「湊の勘八」の名で知られ、元は幕府陸軍の歩卒であったらしい。文久年間に旗本知行地に発布された歩兵差し出し命令によって徴集された百姓で、素行の悪さで解雇されたというから札付きである。そうとう狂暴な悪漢とみえて、郷里に戻って来るやたちまち博徒の頭にまで上り詰めた。正道が陸軍所に問い合わせたところ、本名は染谷勘八郎、天羽郡湊村(富津市)の出であるという。

幕府嫌いの侠客ならば、尊皇派か、と正道は危惧した。義勇隊の活動範囲に尊皇派の博徒集団がいるとしたら、少なく見積もっても一大隊は下らない敵と隣り合わせということになる。これを放置しておけば、天保水滸伝のごとき争いになりかねない。ちなみに「天保水滸伝」という講談は、天保年間、利根川下流の笹川河岸で実際に起きた侠客の抗争を元に書かれたもので、まだ総州の人々の記憶に新しい刃物沙汰であった。関東人の血の気の多さはこの講談が語るごとくであり、新撰組の近藤勇なども郷里への手紙に「兵は東国に限り候」と書いているほどだ。仲間に加えれば大きな戦力となろうが、敵にすれば血を見ることになるだろう。

湊の勘八が尊王なのか、佐幕なのか、まずはそれを確認するのが義勇隊の急務となった。

隊長の正道自身が、その足で鹿野山へ出向いたのは、この男の仁義でろう。相手をいたずらに刺激せぬよう、供は平右衛門一人だけである。

賭場は噂にたがわぬ盛況ぶりで、「丁方ないか、ないか」と中盆の威勢のいい声が響き、畳を三間つないだ盆台の両側に男たちが身を乗り出すように座している。それを取り囲む見物人も含めれば、文字通り山のような人だかりができていた。

身なりの小奇麗な正道のことを上客の若旦那とでも思ったか、勘八の子分は見物人を掻

き分けて盆台の前へ案内した。出世鯉の描かれた三曲屏風の内側には、裕福な旦那衆ばかりでなく、現金欲しさに目を血走らせている無宿者ふぜいも多くいる。

「ここらでは見ないお顔ですなあ」

中盆役の男が親し気に話しかけてきた。太いロウソクの炎が背後の影を揺らしている。

「あんたの方こそ、おれの顔を知らないとはもぐりだな」

と正道が戯れに答えると、傍らの平右衛門がぷっと噴き出した。

不審そうに視線を上下させている中盆に向かって平右衛門が、

「島屋の正道さんだよ、知らねえか」

啖呵を切ると、とたんに一座がざわついた。

「おっと、あんたが音に聞こえた木更津の大河内様ですかい。これは失礼いたしやした。あっしはこの敷を取り仕切る、保木多助と申しやす」かっきりと頭を下げた。「で、今宵は丁半打ちに来たんですかい？」

「貸元の、染谷勘八郎殿に会いたい」

「客として来たんでなけりゃあ、帰っておくんな。営業妨害ですぜ」

多助はうそぶいたが、正道は盆台のコマ札を片手で勢いよく払いのけ、

「こちらもそれなりの覚悟で来たのだ。今すぐ取り次いでもらおう」とすごんだ。

勘八の子分がわらわらと二人を取り囲んだが、平右衛門は莫蓙のわら屑を拾って歯をせせりつつ、

「早く呼んでこいや、ぼんくら」と啖呵を切った。

この場での「ぼんくら」ほど相手を小馬鹿にした言葉はない。博奕の進行役である「中盆」は、暗算ができなければ務まらず、よほどの利口者にしか務まらない。これを由来として、頭の回転のにぶい者を「盆に暗い」と蔑み、略してぼんくらと呼ぶのである。中盆に向かってぼんくらとは、侮辱にもほどある。子分どもが激昂して脇差を抜き払った。

「やめんか！」と多助が制したのは、相手もまた島屋門という一大勢力だからである。子分の一人に何やら耳打ちしてアゴをしゃくり、「しばしお待ちを」などと涼しい顔をして

みせる。

やがて姿をみせた染谷勘八郎は、意外にも、歳は正道と変わらぬほどであり、目のつり上がった細面、こめかみに浮き上がる青い癇筋がこの男の荒い気性を感じさせる。化け猫の絵柄をあしらった派手な小袖を着、一寸八尺を越える長脇差を落し差しにしている様は、なかなかの貫禄であった。

「おう、幕府の犬のツラを、化け猫が拝みに来たぜ」と、細面には太すぎる真鍮製のキセルをくわえて煙を吐いた。派手な女郎を左右にはべらかせているあたり、賭場ばかりでなく、娼家からも上まえを取り立てているのだろう。

そんな染谷を一瞥して、正道はふっと苦笑する。

「大尽風を吹かせているな。で、単刀直入に聞く。あんたは尊王か、佐幕か」

「は？　そうたもんどうでもいい。おれは、おれ様よ」

平右衛門は口にくわえていたわら屑をぷっと噴き出してゲラゲラ笑った。

「おれ様か、そいつはいいや。で、そのぶっといキセルは、団十郎の魚屋団七でも気取ってるのかえ」

「おう、これか」と吸い口の方を持って振り上げると、にやついた表情のまま、傍らの子分の脳天を雁首で思い切り打ち据えた。不意打ちをくらった子分は足元をふらつかせ、その場に崩れた。

「おれが歌舞伎だの粋なんぞにうつつをぬかす男だと思うか。これは喧嘩キセルよ。使い方は、いま見たとおりだ」

染谷がキセルを振り上げたその瞬間、正道と平右衛門は片膝を立て、刀の鯉口を切っていた。正道が問う。

「あんた、武芸の心得は」

「そーたもんねえよ」

「ならば、その腰に差した脇差をどう使う」

「これか……」と鞘を払い、地鉄に映る自分の顔を眺めた。「ただ肉を斬り、骨を断つの

み」

すーっと切っ先を動かして正道の額に突き付けた。抜き身がロウソクの炎をまばゆく反射している。

染谷の脇差の動きを目で追っていた正道は、その視線をふいに染谷の双眼へ向けた。

「刀身に、ヒケ傷がついていない」

「なんだって？」

「刀の扱い方を知っている。幕府歩兵組出身という噂はほんとうだな」

「ああた糞みてえなところにいたからって、何の箔にもなりゃしねえよ」

「文久二年の兵賦令では、背が高く強壮な者が選ばれたと聞く。まさにあんたがその通りだ」

「おめ、何が言いてえ」

「我が義勇隊に加わらんか」

「くだらねえ」失笑して唾を吐いた。

「なにがくだらん」

「幕府のために戦うなんざあ、金輪際ごめんだ」

脇差を鞘に納めた染谷は、子分が用意した背もたれ付きの床几にふんぞり返り、女郎に酌をさせた。「あんたらも飲むか」

「なぜ、幕府のために戦おうと思わない。あんたも天領の民だろう」

酌をする女郎の顎を親指でなぞりながら、染谷はクックッと肩を揺すって笑った。

「水戸の尊攘派が筑波山で挙兵したときによ、おれたちゃ歩兵組は、軍帽かぶって、白い筒袖に背嚢しょって、えっちらこっちら出動させられたのよ」

杯を飲み下すと、ぐっと身を乗り出し、肘を片膝にのせた。

「下妻っちゅうところまで進軍したとき、浪士勢に夜襲をかけられたんだが、そのときな、ぶったまげたことによ、旗本どもはおれら農兵を置ぎ去りにして逃げやがった」

染谷はあきれたように大きく首をかしげてみせると、たちまちのけぞって笑い出した

。

「あの戦で、おれは浪士勢を片っ端から銃槍で突きまくった。人を殺すってのが、こうた簡単なことなのかと驚いたが、しまいにゃ楽しくなってきた。そうこうしてるうちに遁走した侍どもに追いついたから、総大将を張っ倒してやった。ついでに耳でも斬り削いでやっぺと思ったが、泣いて命乞いしてきやがる。あんとき耳削いでたらあ、まあ、解雇じゃすまなかったっぺな。大河内の兄さんよう、今の幕府はもう終わりよ」

旗本の醜態は聞くに忍びなかったが、正道は一度大きく息を吸って、食い下がった。

「それで幕府を見限るのは性急すぎやしまいか。勇猛果敢の士はまだあまたおる。重ねて聞くが、あんたに佐幕の志がないなら、尊王の大義を唱える者か」

「政事なんぞ、まるっきり興味ねえや。ここにいる連中は皆同じよ。欲しいもんがありゃ、持ってる奴らからふんだくって、その日その日を祭りのように生きてえだけだ。もう帰んな。佐幕だの、尊王だの、暑苦しいぜ。義勇隊だかなんだか知らねえが、やりたきゃ好きにやれってんだ」

飲みかけの盃を正道の膝元に放り捨てて、染谷はその場から立ち去ってしまった。

再び盆台の前に保木多助とツボ振りが座り直すと、

「さあさあ、勝負再開だ。てなわけで島屋さん、お引き取りなすって」

すげなく正道をあしらうと、詰め寄って来きた客を見回して「半方、ないか、ないか、ないか半方ッ」と声を上げた。

初夏、にわかに請西藩が慌ただしい。

この、望陀郡請西にある一万石の小藩は、さかのぼれば徳川家草創期に起源をもつほど古い歴史を背景にもっている。この故事については先にも触れたが、もう一度かいつまんで述べてみたい。

永享十一年、鎌倉公方に加担した世良田有親・親氏の親子が戦に敗れて信州林郷へ落ち延びてきた。この地の領主が林家初代の光政で、貧しさゆえに格別のもてなしもできない

ことを心苦しく思い、雪の降りつむ年の暮、自ら弓矢を手にして猟に出る。そこで得た一羽の兎を吸い物にして、心ばかりの年賀の膳としたのであった。この後、世良田は三河で松平姓を名乗る。すなわち徳川家康の先祖である。松平親氏は、あのときの兎こそが家運隆盛の吉祥であったとして、光政を召し抱えた。さらにはこの故事をもとに、林家が将軍に兎の吸い物を献上し、将軍から酒を賜る「献兎賜盃」の儀式が、徳川幕府の年頭行事となった。

誉れ高き林家は、代々番方を勤める旗本となり、子孫は三千石を知行した。直参旗本ともなれば格式も高く、幕府の顕職を務め、縁組の相手も十万石以下の大名である。林忠英という人の代になって、十一代将軍家斉に重用され、側近として要職を歴任、相次ぐ加増で禄高が一万石を越え、晴れて大名となったのだった。このとき得た領地が上総国貝淵(木更津市)で、貝淵藩の立藩をみたが、後に藩庁を請西村の高台へ移し、嘉永三年、名を改めて〈請西藩〉となる。ごく新しい藩なのである。

当主忠交は請西立藩から数えて二代目であり、安政六年から伏見奉行を勤めている。寺田屋に潜伏中の坂本龍馬を襲撃した時期の奉行がこの人で、都の治安維持に尽力し、その心労がたたったものか当年六月、三十五歳で急逝した。まだそのことを国元は知らず、訃報を伝える早馬は房総往還の途上にある。

近ごろ諏訪数馬の顔に血色が戻りつつある。防具を着けた打ち合い稽古もさまになってきたが、三千太郎が特に熱を入れて教えているのは鎖鎌で、数馬の病の具合や体力を配慮したうえでの判断であった。柄の長さ一尺六寸、鎌刃五寸、この刃は折り畳んで柄に収めることができるようになっている。鎖分銅の長さは七尺もあり、これを振り回すことで敵の接近をかわせるし、危険な距離まで間合いを詰めずとも有効な一撃をくらわすことができるのだ。

稽古には木製の鎌が使われ、紐の先に分銅と同じ重さの砂袋が付けられている。これを扱う数馬の手も最初は血をにじませていたが、ほどなく手指の皮も厚くなり、三千太郎が

振りかぶる竹刀を絡め取り、体を捌いて籠手を打つ、といった高度な戦い方も身についてきた。一途なほど懸命な数馬の顔を見るにつけ、三千太郎は心の奥底で、土間にしゃがみ込んで料理に打ち込んでいたなをの面差しをそこに重ねている。

地曳家の者は、はじけるようによく笑う。なをもそうだったし、すまも数馬もそうである。今日は天気がいいと言って笑い、梅干しがすっぱいと言って笑い、笑ってばかりだと言って笑う。数馬も厳しい稽古の合間合間で、滝のようにしたたる汗を拭きながら、から咳をしつつ笑っている。三千太郎が熱心に請西に通い詰めているのも、その笑顔に癒されていたからかもしれない。

「ミチタ殿ほどの腕前なら、剣術指南役として引く手あまたでしょう。仕官について考えることはないのですか」

首筋の汗を拭いながら数馬がたずねた。

三千太郎は、そんなことついぞ考えたこともなかったから、

「おれは、木更津を離れたいと思わないな」と小首をかしげた。

「きっと、ヤマトタケルも同じ気持ちだったのでしょうな」

そうつぶやいた数馬は、我ながら何を言ったものかと慌てた。

「これは、失礼ござった。余計なことを申してしもうた」

「いや……」と三千太郎は軽く首を振ってみせたが、

君去らず、袖しが浦に立つ波のーー

あの古歌を心の中で反芻して、胸に迫るものがある。初めてきみさらずの伝説をなをから教えてもらったとき、不思議と心の琴線に触れたのは、後の運命をどこかで予感していたからだろうか。

「木更津の語源についてはあまた説もござろうが、拙者はキサゴの津が有力じゃと思う」と、数馬は場をとりつくろうためにそう言ったのかもしれない。

「同感です」

三千太郎が真面目な面持ちでうなずいてみせると、二人は顔を見合わせて笑った。

そのとき、若い藩士が練武場の上がりかまちへ飛び込んで来るや、息を切らせて藩主死去の一報を伝えた。

とたんに数馬は顔色を失い、詳細の一言一句も聞き漏らすまいと耳を傾けていたが、すべて聞き終えると膝を落とし、肩を震わせて泣いた。

三千太郎はこの場にいることをはばかり、防具を引っかけた竹刀を肩にかけ、そっと練武場をあとにした。

請西藩の藩庁は、間舟台という高台に建っている。城を持てるのは石高三万石以上であるから、この藩は陣屋を政庁兼藩主の住まいとしていた。文字にすると「真武根陣屋」と書く。「間舟」が武張った漢字に変換されているが、これは武家の気風である。

参考までに補記すると、「一石」という単位は約千合のお米のことで、大人が一食につき米一合を食べるとすると、一日三食で三合、一年で千九十五合、概算で千合となり、これを一石と数える。このことを頭に入れておくと、加賀百万石とか、一万石の小大名などと呼ばれる藩の経済力がつかみやすいかもしれない。

真武根陣屋は木更津湊から約二キロほど内陸にあり、敷地の総面積は二万四千坪以上、小名の家格にしてはかなり規模が大きい。移転前の貝淵藩陣屋を下屋敷と呼ぶことから、ここは上屋敷とも呼ばれている。間舟台の標高は五十メートル程度であるが、視界に遮るものがなく、晴天ともなれば抜けるように見晴らしがいい。

陣屋の大手口を出た三千太郎は、白南風に洗われた眺望へ顔を向けたままゆっくりと歩き出した。袴の股立ちを取った侍たちが、小走りに三千太郎の傍らを過ぎてゆく。藩主逝去の一報が藩士たちに広まりつつあるのだろう。数馬さんも忙しくなるな、と三千太郎は思った。坂の下に矢那川が流れており、その向こう側に新緑の太田山が見えている。請西での稽古の帰り、三千太郎は必ず地曳の本家に立ち寄って、仏壇を拝んでくる。

なをの母とみは、そんな三千太郎をいつもからかう。

「女は一旦嫁せば婚家のもの、だからここに、なをはいませんよ」

と笑顔で言うのも、一日も早く義理の息子に立ち直ってもらいたいという母心に違いなかった。

姉のすまが父親似で、なをは母によく似ていた。もしなをが長生きしたら、きっとこんな風に歳を重ねていくのだろうなと三千太郎は思っている。

仏壇の前に座ってお鈴を鳴らすと、真鍮の澄んだ音が細くゆったりと響く。その音は仏間から座敷へ、囲炉裏から土間へと響いてゆくのだった。三千太郎の後ろでとみがお茶を用意してくれている。お茶請けはきゅうりの味噌漬けだった。

とみは小皿を眺めて寂し気に微笑んだ。

「なをが漬けた漬物も、これが最後ですよ」

田植えの時期で奉公人たちは出払っており、家の中がしんと静まり返っている。庭で放し飼いにされている鶏のコッコッという鳴き声がかすかに聞こえた。よく見れば義母の丸髷にもだいぶ白いものが目立ちはじめている。

その髪を軽く撫でつけながら、とみはしめっぽくなりがちな声色を変えた。

「去年仕込んだなをのお味噌は、まだ残ってるの？」

「はい。実家にあります」

「おつけにして、早く食べちゃいなさいね。わたしたちがいつまでも悲しんでいたら、なをが心配してあの世へいけなくなってしまうから」と朗らかに笑ってみせるのだった。

今日、ここへ来る途中、畔にいくつもえじこが置かれ、その中で乳飲み子が眠っていたり、泣いたりしていた。まだ太田村にいた頃のなをは、農繁期で赤子の世話まで手のまわらない親たちに代わって、子守をするのが大好きだった。だからわたしはねんねこの扱いには慣れていると言って、自分が母親になる日を楽しみにしていたのである。そのことを思い出しながら、ここまで歩いて来た。味噌漬けの、最後の一切れを噛んでいるとき、三千太郎はこれまで胸につかえていた思いが、突然言葉になって溢れてくるのを抑えることができなかった。

「お腹の子が双子でなかったら、なをは死なずにすんだかもしれない」

縁側の外へ向けた三千太郎の目のふちに、涙がにじんだ。

「おれの血筋が畜生腹だったから、あんなことになったんです。おれと出会わなかったら、あんなことにはならなかった。まだここで、元気に漬物や味噌を作っていたはずです」

両膝の上に置いた手を、ぐっと握りしめた。

「なをは、すごく痛かったろう。最後の最後に、地獄ような苦しみを味合わせてしまった。あんなに可哀そうな死に方をさせてしまったのは、全部おれのせいです」語尾は震えて声にならず、崩れるように床に手を付いた。「ゆるしてください」

とみはとっさに何か言おうとしたが、声がつまって何も言えなくなり、手拭いを顔に押し当てて泣き出してしまった。静かな午後の屋敷に、二人の泣き声だけが響いた。

ようやく息を整えたとみは、目頭を拭いながら言った。

「あなたのせいであるわけないでしょう。誰のせいでもありません。あれがあの子の寿命だったのです」

三千太郎は口元をきつく押さえてこれ以上泣くまいと歯を食いしばった。

「三千太郎さん、なをの母として、お願いがあります。時間がかかるでしょうけれど、いつかはなをのことを忘れなければなりませんよ。そうして、またいつか好いた人と結ばれて、幸せにならなきゃだめ。なをも、きっとそれを望んでいます」

とみのことばが、三千太郎の胸をさらに強く締め付ける。実の親にこんなことを言わせてしまうほど、死というものは残酷で、救いがない。三千太郎が別の誰かと夫婦になることを、なをがほんとうに望んでいるのか、確かめるすべなんてどこにもない。三千太郎は、なをが息を引き取ったその時から、ずっと途方にくれているのだった。

そこへ、田植えの様子を見回ってきた地曳新兵衛が帰って来た。三千太郎の姿を見るなり「お」っと片手を付き出し、

「三千太郎よ、もう聞いたか、お殿様がお亡くなりになられた、えれえこった」とうわずった声を上げた。

「公方様、天子様ときて、今度は請西候だ。こういった不幸は不思議と重なるものだねえ。この先、天下はどうなることやら。そうそう、新一郎が義勇隊の船手頭となり、大変な名誉ですと正道さんに伝えておいてくれんか。わしも及ばずながら息子を支えてゆく所存。お前さんも、いざ鎌倉、といった心意気じゃあないかね」と、身の内に高ぶるものがあるのがありありとうかがえる。

義父の興をそがぬよう三千太郎は、

「そうですね、イザカマクラ」復唱して高らかに笑ってみせると、そっと目配せでとみにいとまを告げて、地曳家の門を出た。

なをの実家の裏山が〈恋の森〉と呼ばれているのも、思えば不思議なめぐり合わせではなかろうか。初恋の人の子をお腹に宿したまま逝った十七歳の魂は、恋という淡い暖色に包まれていたのだと、たとえば縫之進なら、そんなふうに言うかもしれない。三千太郎はふと立ち止まり、振り返って森を見上げた。そのとき初めて、

「三千太郎さんも、大切な人を失ったら、ここを立ち去れなくなってしまいますか」

というあの日のなをの問いかけに、うんともいやとも答えていなかった自分に、三千太郎は気付いたのであった。

村人が農具をしょい込み、裸足のまま畔道を歩いてゆく。一日えじこの中で過ごした赤子らも、母親に背負われて帰ってゆく。長く伸びた影の向こうに、大きな太陽が暮れかけている。三千太郎は辺りがすっかり暗くなるまで、恋の森の裾に立ち尽くしていた。

敵を作らない、ということが、どれほど高度な処世術であるか、およそ凡人には計り知れないものがある。請西藩江戸上屋敷に仮住まいしている万里小路局という女性の生き方がまさにそれであって、おそらく彼女は稀にみる賢者であったに相違ない。

万里小路が大奥に上がったのは十九のとき、父は大納言池尻暉房と伝わるから、貴族のお姫様といっていい出自である。徳川家祥(後の家定)の正室として輿入れした鷹司任子

の世話役として、はるばる京から下向してきた。以来、家斉・家慶・家定・家茂と四代の将軍に仕え、大奥で最高位の上臈御年寄にまで昇りつめている。この時期の大奥は泣く子も黙る強者ぞろい、幕閣とも時に激しく対立し、将軍継嗣問題、御台所や側室選びにまであなどれぬ影響力を持っていた。老中からの倹約命令さへ突っぱねたという姉小路局、嫉妬深いと評判のお志賀の方、武家出身の天璋院篤姫、その懐刀幾島、皇女和宮、酒乱の実成院、いぶし銀の滝山、紅絹紐に銀の鈴を付けた「サト姫」こと篤姫の愛猫に至るまで、クセの強い個性たちが権勢を誇り地位を競い合い、激しい火花を散らせていた。この大奥を統べていた筆頭老女こそ、万里小路局であった。不思議なことに、彼女の実績や逸話のたぐいは後世ほとんど伝わっていない。故意に存在感を隠していたとしか思えないふしがある。

というのも、万里小路は十三代将軍家定が死去したとき現役を引退したにもかかわらず、次期将軍の御世に再び大奥への出仕を命じられているからである。もし彼女が年功序列で地位を極めただけの人であったなら、大奥三千人とも呼ばれる女中の中に代わりはいくらでもいたであろう。が、白羽の矢は万里小路以外の人には立たなかった。

この時期、大奥は大変な騒ぎになっていたのである。十四代将軍家茂の正室を朝廷から迎えて以来、「御風違い」をめぐって武家と公家の女中たちが真っ向から対立していた。家茂の正室和宮は孝明天皇の妹であり、公武融和を期待されて降嫁したのであるが、たとえば将軍の養母にあたる天璋院と和宮が対面した場合、どちらが上座に付くのか、といった「御順合」すら定まっておらず、いちいち双方のメンツをかけた大問題に発展してしまうのである。和宮側が内親王の格式を振りかざすことに腹を据えかねた天璋院が、江戸城本丸を出て二之丸へ転居すると言い出したことで事態は最悪の局面に至る。もしこれが実行されれば嫁が姑を追い出したかたちとなり、大奥の醜態を世にさらすことになってしまうが、聡明な天璋院も今度ばかりは誰が諫めても前言を撤回しなかった。双方の感情がこじれきって手に負えなくなったまさにその時、万里小路が呼び戻されている。公武の家風の違いに端を発するこの問題は、双方の誤解を解いてゆくところから始めねばならず、朝

幕間の複雑な政治的駆け引きとも絡み合っていたのであるが、快刀乱麻を断つごとく、ほどなくして善処された。これを調停したのは間違いなく万里小路であるのだが、くわしい記録さえ残っていない。彼女が功を誇らず、黒子に徹していたからであろう。我の強い女官や女中の只中にあって、双方しぶしぶであったにせよ和解に歩み寄らせた万里小路の政治力は圧巻といってよく、彼女の人徳、あるいはその人心掌握術は並大抵のものではない。

まだ万里小路が御簾中の世話役だった頃、彼女の才気に惚れこんで宿元となったのが貝淵藩初代の林忠英で、十一代将軍家斉の寵臣でもあった忠英と足並みをそろえるように将軍付小上臈となり、生き馬の目を抜く大奥で着実にキャリアを積んでいったのである。和宮降嫁のひともんちゃくを解消した後は、すでに生まれ故郷の京に縁故もなかったから、実家のように繋がりの深い林家の江戸藩邸に仮住まいをしていた。

上級身分の大奥女中は終身不犯で、原則、子をもうけることがゆるされていない。そんな万里小路が我が子のように気にかけている存在が二人あって、その一人が、請西藩三代目を継いだ昌之助であり、もう一人が元部屋方の川名里鹿であった。

昌之助は、藩主継承にあたって名を〈忠崇〉と改めた。かねてよりこの日を待ち望んでいた万里小路は、新しい具足を一式、ずいぶん以前から内々に用意していた。晴れてこれを贈る日が来たことを幸いとしながらも、予想以上に背丈の高くなった昌之助の身体に鎧の寸法が合うかどうか心配でもある。兜の忍緒を締めた昌之助が鎧金具の音をたてて奥の間に現れたとき、万里小路は万感の思いにかられて瞼のふちを濡らした。それは長年彼女に仕える侍女の都山さえ初めて見る涙だった。

「昌之助殿、いえ、これからはお殿様とお呼び致さねばならぬが、まことそなたは幼少より、人君の器がおありなさる。眉秀で鼻筋とおる面立ちは光源氏のごとくであらせられるが、その軒昂たる眼差しはまさしく御父上ゆずりのもの」

と万里小路は扇子を膝に立てて目を細めた。

錦の陣羽織を纏って立つ忠崇の兜の前立ては「銀色兎」、鎧は「兎胴丸拵」という新奇

な出で立ちであった。

「女の見立てとお笑いになるやもしれませぬが、そなたのように美しき若武者であれば、献兎賜盃に由来するその兎の前立ても、きっと引き立つものと想像し、けだしその通りであったと、この万里小路、新たなお殿様の凛々しきお姿を拝見して感慨無量にございます」

と目に袖を当ててうなずくのであった。

忠崇自身も、兎が後ろ足を跳ね上げている前立物を見、先祖代々誇りとしてきた故事の意味、すなわち徳川家とともに苦楽を共にするという心意気をあらたにしている。

「まて様」

と、万里小路は呼ばれている。大奥女中の最高位ともなれば、その社会的地位は十万石大名の格式に匹敵し、この身分の人は自分の名を略式などで呼ばせたりしない。けれどもこのひとは、下女にさえおおらかに「まて様」と呼ばせている。そして自分は部屋方の若い女中を花の名で呼んだ。里鹿のかつての呼び名は「椿」である。あるいはこれも、彼女の人心掌握術の一つであったのかもしれない。

忠崇は片膝を付き、万里小路の手を取った。

「それがし先年母を亡くし、もはやこの世に母とも慕うお方はまて様おひとりにございます。どうかお体ご自愛せられたく、この先も忠崇をお支え下さりませ」

と手に取ったその手をさらに強く握りしめた。

大奥女性は白髪を染めるのがたしなみとされていたから、万里小路の髪は未だ烏の濡れ羽色である。髷は笄を差しただけの片はづしであったが、その豊かな毛量は御年五十四とは思わせぬ若々しさであり、四つ歳下の都山の方がずっと老けて見える。

都山は黒香油をつけると頭皮がかぶれてしまうため、白髪頭で通していた。生来生真面目な性格で、手を取り合う二人を眺めてしとどに涙を流しながら、

「憚りながら、かねてよりお願い申し上げておりますわたくしどもの隠棲地の件でございますが……」などと俗用を持ち出す。

忠崇は思い出したように都山へ顔を向けた。

「仔細は国元に伝えてある。まて様の仮宿となる長楽寺は古くより徳川宗家の信仰も篤く、江戸湾を一望のうちに見渡せる古刹と聞き及んでおります」

と、途中からはまて様に向かって話しかけた。

忠崇は、長楽寺を実見したことがない。江戸藩邸で生まれ育ったため、未だ国元に入部したことがなかったのだ。けれども、まだ見ぬ藩地の風光は家士から聞き及んでいる。陣屋の建つ丘は緑深く、江戸湾は金襴のごとく、湾を隔てて見る富士は一幅の絵のごとし、と。

「きっと、まて様もお気に入りくださることでありましょう。転居にあたっては、お道具送り、ご調度品の新調、ご邸宅の新普請など、一切のお支度は藩を挙げてお手伝いさせていただきます」と胸を叩かんばかりに意気込んだ。

「とんでもございません」

万里小路はかすかに首を振って恐縮した。

「いまは諸物値上り、幕政も危殆に瀕しております。このような折柄、わたくしごとき老骨にかまわず、何より天下のことを第一にお考えくださりませ。わたくし、奥に四十年以上相務めたるものなれば、引退後も現役と同額の扶持を賜り、様々な手厚い待遇もございます。ですので諸事控えめでよろしゅうございます。林家のかたえに閑居することかないますれば、それ以上望むこととてござりませぬ」

これが偽らざる本音であったが、江戸城の本丸御殿に四十年以上も勤続した万里小路の経済感覚は、質実な武家の女性とは途方もなくかけ離れていることに、この時はまだ気付いていない。万里小路の年収は五百石クラスの旗本並であり、運搬する調度品の量は膨大なものになるだろう。忠崇はそれを踏まえて手伝いを申し出たのであったが、これについては都山が自信ありげに、

「奥向きの御用人の中に、これはと見込んだ若武者がおりますので、この者に家移りの統督を致させる所存」

と胸を張った。

「都山殿に見出されるとは、立派な侍なのでござりましょうな」

「わたくしの目に、狂いはございません」尖った顎をしゃくるのであった。

後日その「これはと見込んだ若武者」が請西藩江戸上屋敷の奥の一間に呼び出された。

都山が太鼓判を押した若者にしてはえらくさえないというべきか、小柄で、地黒で、小太りであった。が、黒光りした大黒天の置き物のようにどっしりとした貫禄もある。

先年、都山が万里小路の代参で芝増上寺へ出向いたとき、警護の大奥用人の一人に、この若者がいた。道中、毛を逆立てた野良犬に吠え立てられ、陸尺が脛を噛まれかけて右往左往の大騒ぎとなったが、この若者が仁王立ちして一睨みすると、猛犬は瞬時に吠え止み、ぶるぶる震えてしゃがみ込んでしまった。この様子を駕籠の中から覗き見た都山はいたく感心し、そなた、ただ者ではないなと声をかけると、

「恐れながら、ただのただ者に過ぎませぬ」若者は地べたに平伏し、よく通る健気な声で答えた。

「居縮の術なるものを、同僚の御広敷伊賀者から教わったことがあります故、それをためしてみただけにござります」

「ならばそなた、伊賀組同心か」

「いえ、一介の旗本にござります」

「さぞや武勇に秀でたお血筋の出であろう」

若者は顔を伏せたままやや身を起こし、長重流、浅野大学が末裔、と答えた。面を上げさせてみれば頬骨のたくましい丸顔で、当世文弱な旗本の子弟と比べれば、昔気質の都山からみてなかなかの好男子といえた。以来お気に入りとなり、万里小路のなじみの用人となったのである。

「このたび」と都山は手を膝にして申し付けた。「御府内からの退去にあたって、荷送り一切を、浅野作造頼房に一任致す。よろしゅうたのみますぞ」

作造はうやうやしく総髪の頭を上げると、地黒ゆえに映える並びのいい白い歯をのぞかせた。

「万事お任せ下さいませ。この作造、まて様の鼻紙一枚に至るまで、無事お荷物を請西へお運び致します」

上座で万里小路が手を打つと、女中が陣羽織を捧げ持って入室し、これを作造に与えた。紫の羅紗地に折り返しは鮮やかな錦織、背には浅野家の家紋まで刺繍されている。立ち上がって腕を通した作造は感激のあまり思わず涙ぐみつつも、まこと晴れやかなる笑顔を見せて、万里小路の心遣いに応えたのだった。

こんどの転居にあたって、忠崇からの協力申し出を万里小路が辞退したのは、彼女が武家の習わしをよく知っていたからである。先代急逝にともない代替わりの用務に追われる忠崇や家臣たちに負担をかけまいとしたのだった。一万石規模の藩であれば藩士の数は中間などを加えても二百人程度で、忠交亡き後の伏見奉行所からの引き上げにも人員を割かねばならないはずであり、今後しばらくは主従そろって諸事に忙殺されるであろうと万里小路は察していた。この辺りの気配りが、彼女の身上であるといっていい。

江戸には木更津専用の河岸もあり、物流の盛んな土地でもあるから、作造は、荷物の移動ぐらいわけないものと高をくくっていたふしもある。手配した五大力船は地曳の明王丸一隻であったが、これをまるごと借り切ったのだから、積載については充分と考えたのも無理はない。ところが、勤続四十年ぶんの私物が大奥の長局、桜田御用屋敷、請西藩上屋敷から陸続と運ばれてくると、四十三坪ほどの河岸の敷地がみるみる御部屋諸道具、衣裳類、御手許道具類、雛道具等、葵紋の入った荷箱で埋め尽くされ、積まれた荷が見上げるほどの高さとなったから、これには作造もあっけにとられ、運搬を請け合った地曳新一郎と二人して、ぽかんと口を開けたまま立ち尽くしてしまった。

この事態を見て船持の石渡半兵衛がすかさず名乗りを上げた。

「うちなら今すぐ五大力船を二艘手配できますよ。さらにッ、神徳元年を祝して運賃もお

安く致しやしょう」などと、商魂たくましい。にしても神徳元年については、
「禁句だっつの！」と新一郎に小声でたしなめられたが、もとよりそんな内輪のやり取りなど作造の耳には入っておらず、重くなった面差しを半兵衛の方へ向け、
「その二艘も買おう。他にも、都合のつく船あらばすべて買う」と声を上げた。
結局、万里小路の荷物を運ぶ船は船団を組むこととなり、水軍でも押し寄せたかと湾内の通行船を驚かせた。
「浅野様よ」と、新一郎も帆縄を掴んで船首に立った。
「木更津に着いてからが大変ですぜ。これだけの価値ある荷物だ。野盗の類が群がってくるんじゃないですか」
「野盗ごとき、この浅野が打ち払ってしんぜる」
「いやいや、今の木更津の野盗は、あんた様一人で対処できるような規模じゃないんだ。染谷党ってのが跋扈していてね。やつら平気で脇差を抜く。ほんにやばい奴らなんだよ」
さすがに作造も「フーム」とうなったが、都山から渡された経費を使い果たした今となっては、用心棒を雇うような追加の出費はゆるされないと思う。この辺りの律儀さと、意固地なところが武士の身上であるといえようか。
「荷は自力で守る」と言い切った後、作造が木更津に着港するまで誰とも言葉を交わさなかったのは、乗り子たちの中に、野盗の仲間が潜んでいないとも限らぬと警戒したからだろう。もしもまて様のかんざし一本でも失われようものなら、わしは責任を取って切腹せねばならぬ。作造は悲壮な覚悟を固めた。
湊に積荷を降ろしにかかると、噂を聞きつけた野次馬が方々から続々と集まって来た。海岸線から請西藩内の長楽寺までは一里もないが、なにせ荷が多すぎて、大八車の数も人手も全然足りない。一刻も早く運搬を完了させなければ、それだけ染谷党に付け入るスキを与えることになってしまう。作造は群衆に向かって「誰でもいいから近くの名主を呼んでまいれ」と声を上げた。そして長槍を小脇に抱えて「荷物に触れた者は容赦せんぞ」と叫んで回った。その声は遠くまでよく響き、漢詩でもうならせたらさぞや良い声だろうと

思われた。

やがて吾妻村の名主鈴木市郎右衛門がバタバタ駆けてくると、作造は、

「上意である、人馬を徴発せよ」と大声で申し付けた。

新一郎から知らせを受けた正道が、平右衛門らを引き連れて助太刀に参じたが、

「おぬしらは武士か」と作造は居丈高に睨み据える。

「百姓から成る義勇隊」正道が答えて一礼するも、

「武士でないなら手出しにおよばず」などと疑心暗鬼もあってか無下に助勢を断った。

作造のこの態度にへそを曲げたのは平右衛門で、

「ほお、そうくるかい。これはこれは二本差はえろうござんすねえ。まあせいぜい一人で吠えてるがいいさ。こんな野郎、どうなったってかまやしねえっぺよ、行きやしょう、正道さん」もと来た方へ踵を返し、正道が呼び止めても振り返らなかった。

やがて暮色も深まり、さすがに作造も夜道の運搬はかえって野盗に襲われやすいと判断し、その夜は湊一帯に篝火を灯して寝ずの番となる。

徴用された農民たちはあちこちでいびきをかいており、篝火のはぜる音と、河岸場の石堤にひたひたと寄せる波の音が聞こえている。丑の刻まで起きていたのは作造一人だった。

そこへ。

腰に脇差をぶち込んだ連中がわらわらと湊を取り囲む。闇に紛れて判然としないが、五十人ほどもいるだろうか。その中からのっそりと、髑髏柄の浴衣を纏った男が真鍮のキセルをくわえて立ち現れた。作造はペッと唾を手にかけて立ち上がり、大身槍をしごいた。

「手前が賊の領袖なるか」

「おれが湊の勘八よ。ここの荷はもらっていくぜ」

「野盗ごとき、なにほどのことやある。浅野作造頼房、元結一本、草鞋一双、おまえらの手に渡しはせぬ」

「ほざけ」と染谷は失笑した。雁首を叩いて吸殻を落とすと、
「てめえら、かかれ！」大声を上げた。
子分たちがいっせいに抜き身を振りかざして襲ってきたが、作造は中段に構えて槍先を突き出し、ふんっと長尺の柄を大きく半回転させると、柄の端が砂埃を巻き上げ、足元を払われた子分どもがまとめてひっくり返ってしまった。
「そりゃあ！」と気合一声、作造は体を押し出し、槍先を振るって風を起す。正面の敵を打ち据えてすかさず反転、背後の敵の脛を払い、体を返して胴を突き、縦横に走り回ってさらに繰り出す。子分どもは作造が槍を振り回すたびにバタバタとひっくり返った。が、誰一人直槍に突き刺されてはおらず、柄や後端で打たれるばかり、作造に殺意がないのは明らかだった。その一線を越えないまま、仁王のごとき形相で戦っているのである。
染谷はもはや本来の目的を忘れて、この乱闘が面白くなってきた。ヤツが殺意を剥き出すまで攻めてやろう。手下の背中を蹴り飛ばしながらどやしつけた、「あの小男をぶちのめせ！」
保木多助が「梯子を持ってこい」と叫ぶと、子分どもが梯子を交互に組んで作造を包囲する。まるで講談の大捕物を見るような展開となり、あわやさすがの作造も追い詰められたかと思いきや、大身槍の柄を地面に突き立てて河岸土蔵の壁を勢いよく駆け上がり、ひらりと瓦をふいた屋根の上に飛び乗った。これには子分どももあっけにとられ、下から罵声を浴びせる他にスベもない。
この騒動を物陰から見守っていた農民たちから歓声が上がった。作造も痛快とばかりに大笑いした。
「引きずり降ろせ！」
染谷が抜刀し、おれがあいつをぶっ殺してやると息巻いている。土蔵を囲む子分の数がどんどん増えてゆく。
さしもの荒武者も万事休すか、とうろたえた農民の一人が、腰をかがめて南町の方へ駆けて行った。

「島屋さん、起きてくだせえ！」
店の大戸が激しく叩かれた。おっとり刀で対応した正道は、夜着の裾をたくし上げると、裸足のまま駆け出した。
「義勇隊出動！」
平右衛門が叫んでそれに続き、ややあって、鉢金と胴を着けた幸左衛門、孫左衛門、総三郎、茂三郎も、袴の股立ちをとって門口を出た。
「朝ちゃん、なんだか湊が騒ぎになってるみたいだよ、見に行くべ」
御高祖頭巾を被った豊子が朝三郎を揺り起こした。長合羽を羽織った縫之進も後ろにいる。
「なんだよ、こんな、夜中に」と寝ぼけてしぶる朝三郎を夜具から引っ張り出すと、三人連れ立って旅籠屋町の通りへ出て、野次馬の群れに交じった。
若い隊士が火の見櫓に登って激しく鐘を打ち鳴らすと、八劔八幡神社からも勝秀、勝壽が襷をかけて出てきた。勝壽は鉄砲を担いでいる。
「いったいなんの騒ぎかしら」
クニが格子窓に顔を寄せると、控えめに店の戸を叩く音がする。つっかえ棒をはずすと鉢金を巻いたコンモが入って来た。
三千太郎が夜着の襟を掻き合わせながら土間へ出てくると、
「ミチタ、万里小路局の家来が襲撃されて、義勇隊が出動した。行かねばなるまいよ」と詰め寄った。
「いや、おれは……」
あからさまに顔をしかめたが、コンモはかまわず、
「行かねばなるまいよ」と、もう一度言った。
煙抜きから差し込む月光に照らされた土間が、しばし沈黙に包まれた。クニは両手を胸のところで揉み合わせながら、三千太郎の横顔を見つめている。警鐘の響きは鳴りやまな

い。

ふっ、と短く息を吐いた三千太郎は、夜着を脱いで下帯ひとつになった。クニは慌てて袴を取りに箪笥へ駆け寄り、手早く着替えを手伝った。

刀掛台から二刀を取ったコンモは、それを三千太郎へ差し出す。

三千太郎は黙って両刀をたばさみ、振り返ることなく家を出た。

コンモはクニの耳元に顔を寄せると、

「ミチタはきっと立ち直るよ」

とささやいて、すぐに後を追った。

染谷たちは、篝籠から火の付いた割り木を掴みだし、土蔵の屋根にやたらめったら投げ込んで来る。これには作造も度肝を抜かれ、「やめんか！　やめんか！」とわめいた。

江戸時代の人々にとって、地震、雷の次に恐ろしい災害は火事である。木造住宅の密集する町で火災が起こると、たちまち一町まるごと類焼することもめずらしくない。現に朝三郎が幼少時に起こした火事は、一夜にして木更津南町を焼き尽くしてしまった。以来、防火のために土蔵が多く造られたのは漆喰に含まれる消石灰が燃えないからだ。作造が乗っているのは土蔵の屋根であるが、このままではまわりの家屋に火がついてしまう。作造はつくづく野盗という連中は恐ろしいものだと辟易した。

正道たちが抜刀して駆け付けると、町方同心が両手を開いて行く手を塞いだ。

「手前らの加勢はありがたいが、鼠賊どもを斬ってはならぬ」

御用提灯を掲げた捕吏たちの中から陣笠を被った役人が出てきた。

いつもは冷静な正道も、これには声を荒げて食ってかかった。

「万里小路局の着荷に手を付けておるのです。明らかに無礼打ちに当たる所業ではありませんか」

「ここで刃傷沙汰におよべば事態をことさら大きくすることとなり、荷送人もいらぬ詮議

を受けることになる。死人が出るような取り締まりは致さぬ故、下知に従え」

役人が振りかざしたのは鉄製銀流し十手。関東取締出役のものであり、問答無用の権力を象徴している。

天誅が横行する京師を見てきた正道にしてみれば、総州くんだりの役人は呑気なものだと思わずにいられない。

「ならば、木剣や棒にて戦うならば、問題ございませんか」

「死なぬ程度なら」

「道場からありったけの木剣と六尺棒を持ってこい！」

正道は振り返りざま大声を上げた。

このままでは火が出ると危惧した作造は、土蔵から隣の通り庇に飛び移り、槍の下端を地に付けるや、柄を伝ってふわりと滑り降りてきた。染谷と子分たちは、槍が垂直に立ったこの一瞬を見逃さず、抜き身を振るって殺到する。作造はすかさず腰の大小を抜き、二刀に構えて振り回し、転がるように攻囲を脱した。傷は浅かったが、数か所斬られたようで血がしたたっている。軒端に立てかけてある大八車を突き倒すと、作造はすかさず細い路地に飛び込んだ。

裏木戸を少し開けて外の様子をうかがっている少女がいて、作造と目が合った。慌てて引っ込みかけたが、「たのむ！」と手を伸ばして作造は中に転がり込んだ。薄暗い店舗の中に四斗樽や升、半切桶が置いてあり、においからしてすぐに酒屋だとわかった。これは幸いとばかりに作造は少女に笑いかけ、

「拙者の体に酒をかけてくれぬか」と諸肌を脱いだ。

深手はないにせよ、無数の切り傷から血がにじんでいる。少女は言われるがまま屋号の書かれた徳利を持ってきたが、恐怖のあまり手が震えていた。

「驚かせて、誠にすまぬ。身共は決して怪しい者ではござらぬ故、何も怖がらなくてよい。その酒を口に含んで、拙者の体に吹きかけてくれ」

傷口を酒で洗うのはこの時代の一般的な消毒方法だから、少女もすぐに事態を理解した。が、動揺して歯の根が合わず、口から酒がこぼれてしまう。

「ひょっとこみたいに口をすぼめて、思い切り噴き出してみよ」と教えると、少女はほんとうにひょっとこみたいな顔をして、ブーッ、と勢いよく噴き出した。それが傷にしみること、しみること。作造は声を押し殺して悶絶しかけながらも、精一杯の笑顔をつくって少女に話しかけた。

「そなた勇敢ぞ。名をなんと申す」

「へえ。きせと申します」

「ここの子か」

「いんや、家は吾妻村です。ここの酒屋で住み込み奉公をしとります」

「そうか、感心だな。すまぬが、もうしばらくここで一息つかせてくれ。それと、水を一杯」と所望しかけたところ、ブーッときせがもう一度酒を噴きかけたから、作造は右手を宙に突き出して「うわああ」と白目をむいてのけぞった。

現場に着くなり勝壽は、先込めした弾丸をカルカで突いて、湊の衣類調度品に群がる野盗たちの頭上めがけて引金を引いた。が、火挟がカチンと鳴っただけで不発だった。

「あれ」火蓋を開いて首をかしげる勝壽の銃を、後ろから取り上げたのは三千太郎である。「口薬の量が少ねえんだべ」

火蓋を切り、元薬を込めている三千太郎の姿を目にした幕吏が、鉄鞭を振って「撃つでない」と一喝したが、すでに銃床を頬付けしていた。

バンッッ！　と硝煙があがり、野盗どもが一斉に体をすくめた。幕吏も頭を抱えて首をすくめた。すくめなかった男が一人、三千太郎の方へ鬼のごとき形相を向けた。染谷である。

発砲音に慣れているということは、幕府の歩兵あがりか、と三千太郎は思った。いずれにせよ、実戦経験者だろう、落ち着き払っていやがる。

「飛び道具かッ、おもしれえ。矢玉でもなんでも撃ってこいや！」

染谷が白刃を振りかぶってきた。雑な太刀筋であったが、何の躊躇もなく交刃の間合いに突っ込んでくるあたり、元亀天正の野武士のごとき肝っ玉の太さである。げたげた笑いながら縦横に刀を振り回してくる。染谷の太刀の柄に枠状の鍔が付いていた。歩兵時代に上官から奪ったものだろうか、めずらしい西洋風のサーベル拵であった。

三千太郎も白刃を振りかぶったが、不二心流の剣法は後の先、すなわち守りの刀技であり、染谷のひた押しに押してくる斬人の技をいなすことはできても、なかなか自分の打ち間をつくれない。手が汗で濡れ、胸の辺りが苦しいほど拍動する。

土蔵の壁際まで追い詰められたとき、素早く体を反転させて籠手を打つと、染谷は枠状の鍔でそれを受け、パッと火花が散った。が、次の瞬間、三千太郎の剣先が染谷の喉ぼとけに突き付けられていた。首の皮一枚に食い込む寸止めである。三千太郎はほとんど忘れかけていたが、江戸の練武館道場で修業していた三年間、もろ手突きの名手と恐れられていたものだ。あの頃の身体感覚が、この寸秒で全身によみがえったようであった。

途端に三千太郎の目つきが変わった。

これを見た染谷は、

「こいつはいけねえ」と顔をしかめ、髑髏柄の浴衣をまくってその場から逃げ去った。

作造が隠れている酒屋の店内に明りが灯っている。

店主夫婦も異変に気が付いて、きせと共に作造の手当てをしていた。作造は鉢巻きを締め、小袖をたすき掛けにして、外へ出る準備を整えた。店主は声を落として、

「お侍様、今は出ないほうがええ。今出たらナマスのように斬り刻まれてしまいますよ」

そう何度も止めたが、作造は呵々と笑って答えるのだった。

「このような失態を晒したからには、切腹は必定。惜しむような命ではない」

きせの頬に軽く手を当てると、作造はくぐり戸からすり抜けるように往来へ飛び出した。二刀を構えて周囲を見回すと、いつの間にか野盗と義勇隊が入り乱れての大騒ぎになっ

ている。呼子笛の甲高い音がひっきりなしに響き、御用提灯を掲げた捕吏や目明しが「神妙に致せ」と方々へ怒鳴り散らしていた。さすがは木更津気質とでもいうべきか、野次馬の人だかりの中に甘酒の屋台まで出ている始末である。

作造の姿をみつけた正道は、

「浅野殿、こちらへ参られよ」大きく手招き、「刃傷無用の故、これを」と六尺棒を差し出した。

筵の上に山となす木剣や棒の他に、打ち込みや刺又、捕縄までそろえてある。これを義勇隊士や飛び入りの者に配りながら、正道が実質的に現場の指揮を執っている。

作造は両刀を鞘に納め、

「助太刀、痛み入る。後であらためて謝罪致す」と活舌の良い声で述べると、乱闘の中へ飛び込んでいった。

三千太郎も、勝壽も、素早く木剣に切り替えて野盗どもの後を追ったが、平右衛門だけは納得がいかない様子で木製武器を受け取らない。

「目の前で盗賊どもが悪事を働いてんだぞ、打ち捨ててなんぼじゃろ。武芸者として実戦の経験を積む絶好の機会でねえか、真剣で挑むべきだっぺ！」

頑としてゆずらず、この男のみ抜刀して斬り込んでいった。しかし、叩き斬る気満々だから、野盗もはむかってこないし、蜘蛛の子を散らすように逃げてしまう。それでも縦横へ白刃を繰り出す平右衛門の勇姿は、一人で剣舞でも舞っているようで、少しばかり滑稽の観もある。

木剣を扱う幸左衛門の手錬に長じた剣さばきは圧巻であり、巨躯を機敏に動かして立ち回る孫左衛門の槍さばきも若い世代の比ではない。野盗を打ち倒すたびに見物人から喝采が上がった。

豊が甘酒を買って戻ってくると、朝三郎がじっと乱闘に見入って鼻息を荒げている。

「朝ちゃんは、こういう荒っぽいの好きなの？」

「いや」と我に返って、慌てて目をそらした。

縫之進がすくりと笑って「男はこうゆうの、好きだよね」と合いの手を入れたが、朝三郎は答えなかった。

「とよッ」と総三郎の声がした。

「おまえ、なに呑気に甘酒なんぞ飲んでおるか」

怒鳴って木剣をひょいと投げ渡してきた。豊が反射的にそれを受け取るのと同時に器が足元に落ちてガチャンと割れた。

「なにすんだよ！」

「女といえども、おまえは名流一門の剣士であろう、共に戦え」

「あたし、剣士だったっけ？」

「豊姉ェ、いっちょ暴れてきなよ」縫之進も肘で突いてそそのかす。

「しゃあないなあ……」

御高祖頭巾を目深に被り、木剣をぶらぶらさせながら乱闘の場に入っていくと、紅色の湯文字から白い素足をのぞかせて踏み込み、群がってくる男どもを右袈裟、左袈裟に打ち据えて、バタバタと倒してゆく。

コンモが血相を変えて甘酒の屋台に駆け寄ってくると、

「あんた、一杯十二文はいけないよ。この値はふっかけ過ぎだ。義勇隊として取り締まらせてもらいますよ」などと、野盗よりそちらの方が気になるらしい。

染谷が逃走したことで、一味徒党の動きも組織だった犯行ではなくなり、一部が銘々勝手に盗品を持ち去ろうとしているにすぎなくなってきた。あとは町方同心や目明しにまかせておけばいいだろう。

地曳新一郎や石渡半兵衛ら渡海輸送にかかわった船持や積問屋が荷箱の点検に取り掛かり、強盗被害の調査を始めた。その間、作造は正道の元へやってきて、義勇隊の加勢に謝意を述べ、昼間の無礼を率直に詫びた。

村の若衆を引き連れ現場に駆け付けた吾妻村名主鈴木市郎右衛門と、作造、正道の三人

は、三つ葉葵が金蒔絵で打ってある表道具七品が無事であったことをまずは喜び、徳川宗家の未だ衰えざる財力を誇らしげに語り合うのだった。三人はすぐさま意気投合すると、今宵の乱闘の余勢を駆って、湊に積み上げられたままの長持や行李を、夜を徹して長楽寺まで運んでしまおうと決めた。

乱闘騒ぎを聞きつけて請西から真っ先に駆け付けた諏訪数馬が、藩を代表して荷請することとなり、湊の小揚人足や宿場の雲助に助力を呼びかけ、野次馬までも動員し、近郷の農耕馬も駆り出して駄送の列をなした。これを引率する作造は自ら馬の口を取り、木更津といえばこれとばかりに、

「ヤッサイ、モッサイ」

大声で音頭をとると、男衆はつられるように唱和する。

ヤッサイ、モッサイ、ヤッサイ、モッサイ、

宵闇に響くかけ声は神輿行列のようであり、これを聞きつけた沿道の男たちが、続々とねじり鉢巻きで加勢してきた。

にぎやかな陸送が始まったころ、捕方役人の突き出した寄棒が三千太郎と平右衛門の体を左右から押さえ込んだ。陣笠を被った幕吏が鉄鞭で二人の顔を指し示し、

「この者ら、町人の分際で下知に逆らうとは不届き千万。一人は発砲、一人は刃傷沙汰に及び、はなはだ過激にして早まった行い、誠にもって許し難し。よって召捕る」と声高に罪状を述べた。

この当時の役人は、公然と賄賂を受け取ったものである。関東取締出役にしても二十俵二人扶持しか収入がなかったため、自前で活動するためには元手が足りず、不足分を収賄で補っているありさまだった。それを心得ている幸左衛門は、「いま、幾らか包みますので」と役人に耳打ちしたが、なぜか今度ばかりは袖の下を受け取ろうとしない。乱闘の間中、正道が現場を取り仕切っていたことで面目を潰されたと臍を曲げているのかもしれず、それでわざわざ「町人の分際」などと強調したのかもしれない。

地べたに押し付けられた三千太郎と平右衛門は、有無をいわさず後ろ手を十文字に縛り上げられて身動きがとれなくなった。この様を見た豊は役人の肩を後ろから思い切りこづいた。

「本縄で縛るのは罪が確定してからだろ。いちども吟味せずになにやってんだよ、この阿呆至極が！」

どやされた幕吏のこめかみに青筋が浮き上がり、振り返りざま鉄鞭を振り上げたが、すかさずその手首を取り押さえたのは総三郎であった。

強く腕を取られてもがきながら、幕吏は怒鳴り声をあげた。

「この女も引っ立てい」

捕方役人が二人がかりで豊の体を引き倒した。

とっさに刀のこじりを上げた総三郎を、孫左衛門が慌てて背後から取り押さえた。

総三郎は全身をわなわなと震わせ、顔を真っ赤にして、

「憚りながら、我が一門は微賤の身分ではあれど、決して兇賊の類にあらず。誓って他を害する心なぞなければ、なにとぞ御諒察願いたし！」と口角泡を飛ばし、目を血走らせた。激高極まって鼻水まで垂らしている。

その顔を見て豊は思わず噴き出し、

「オヤジ、興奮し過ぎ」縄に掛けられながら笑顔をつくってなだめたほどであった。

この事態を知らされた正道が駄送の列から急ぎ引き返してきたが、すでに三人は四方ヶ原の獄舎へ連行された後だった。

房総丘陵の稜線が白々と明ける頃、万里小路局の長持類は、すべて長楽寺の境内か、真武根陣屋の敷地内に運び込まれた。盗難された物品は予想よりはるかに少なく、はっきり把握できているものは夏用の筥枕、爪とり鋏、定紋入り盥の三点だけで、膨大な衣類調度品をほぼ死守したことになる。船持の石渡半兵衛などは大いに満足して、

「やはり神徳元年には、神仏のご加護があるのだなあ」と西方の富士をうやうやしく拝す

るのだった。

運搬に加勢した人々に慰労の酒が振舞われた。船持も積問屋も身銭を惜しまず大盤振る舞いをした。徳川の御紋が打たれた着荷を野盗の手から守り、それを目的地に運びおおせたということが祭りのごとき喜びを催させるところに、幕府お膝元の民心をうかがうことができる。酒の調達については、作造の口添えで、奉公人きせのいる店から樽買いされた。

余談ながら、石渡半兵衛が取引先と交わした通帳の表紙に「神徳元年」と記されている。他にも永地村の村役人が作成した年貢の書上帳の表紙にも「神徳元卯年五月」と書かれているが、これについては「神徳元」の部分を二本線で抹消して、横に「慶応三年」と訂正がほどこされている。この二点の簿冊が現存することで、私元号神徳の存在が後世に伝わっているのである。